六　待

敵と戦う時には、常に六時の法というものがある。一には誘っておいて敵が来るのを待ち、静かにしていながら敵が騒がしくするのを待ち、慎重にしていながら敵が軽率になるのを待ち、厳正にしておいて敵が怠惰になるのを待ち、治めておいて敵が乱れるのを待ち、守りを固めて敵が攻めてくるのを待つ。この中で誘って相手を来させるというのが、つまり「人を致す」ということである。相手をして我の欲するところに来たらしめる事は、魚を釣る餌のようなものである。相手が遠くから来て、我が近くでこれを待つときには、静かさと騒がしさ、慎重さと軽率さ、治まり乱れること、それぞれの格差がより大きくなる。優れた将軍の戦は、未だ「敵が我を攻めても勝てない態勢」が整っていなければ、戦うことはない。そうであれば、軍制を厳正にして敵が怠惰になるのを待つ。戦って勝てない者は、先ずこれを守るに越したことはない。これが孫子のいわゆる「足らざる者は守る」である。又、「良将は不敗の地に立って敵の敗るを待つ」と云うのとも同じである。攻守ということは、元来は敵の国を攻め、城を守るということだけに止まらない。これも又、孫武の「彼を知り己を知る」と云うことである。私が兼ねてから制するところの五位の変端の中においても、待位を以て大功とするのはこのことによる。待っている中にこそ最も権（戦機＝一挙に勝敗を決する切り札）がある。待つことに心を懸けるのと、心を懸けて待つのと、これらを待中懸と名付けて、日ごろから私が戦う毎に用いてきたところである。戦は卒爾（だしぬけ、突然）であっても過ちが多く、遅くあっても利を失うことがある。ただ待中先幾（待っている中で戦機を先んずる）を専らとしなければならず、しかも幾中待（戦機の中に待つ）を忘れてはならない。